

ア 点歩

6月例会 2台ピアノコンサートを聴く

湘南コンサートの6月例会は6月6日(土)、藤沢リラホールにて開催され、今回は、エールアンサンブルとの初めてのコラボレーションである、千野宜さんを迎え、エールの加藤真矢子さん、渡辺久仁子さんとともに、「2台ピアノ：国内屈指の音響」と銘打ったプログラムでした。

プログラムは千野さんと加藤さんによる2台ピアノの定番であるモーツァルトソナタニ長調K.448を皮切りに、加藤さんと渡辺さんとでリストのドン・ジョバンニの回想、後半は千野さんのベートーヴェンソナタOp.57「熱情」、千野さん、渡辺さんでのベートーヴェン(リスト編曲)交響曲第九番よりが、文字通り、リラホールに響き渡りました。

今回は、2台のピアノの音が狂うと響きに支障が出てしまうので、本番前の調律については、通常の演奏会の調律に比べ2倍の時間を要しました。

結果として、通常の演奏会より10分近い開場時間となりましたが、更に、調律師がコンサート終了まで見守ると



撮影 坂野裕章

いう万全の態勢でコンサートが行われました。

リラホールでの極上の2台ピアノの響き、軽やかで華やかなモーツァルト、リストのドン・ジョバンニではオペラで聴くのとまた違って、リストならではの華やかな技巧的装飾と変奏によりオペラを回想させるごとく曲が進んでいくので、大変聴き応えがありました。千野さんのベートーヴェン熱情ソナタは圧巻でした。ベートーヴェンの第一人者と呼ばれるのが頷けます。

エール初登場、脂が乗っている千野さんと渡辺さんが奏でる第九ではオーケストラサウンドを聴いているような迫力がありました。加藤さんと渡辺さんの2台ピアノ特有の遠い演奏者の距離感を縮めるための二人の思慮い

が、観客席まで聞き取り、「2台ピアノ」演奏会特有の別な楽しみが味えたと思います。

ホロヴィッツが愛したスタインウェイの響きをF1レーズに例える千野さんの話や、アンコールは3人による連弾の演奏でアイネクライネナハトムジークでの楽しい締めくくりもあり、演奏会後、御客様から「大満足だった」、「ピアノの迫力に圧倒された」等の感想を頂きました。

(文責：石塚一弥)

湘南アマデウス合唱団・合奏団第17回定期演奏会 モーツァルト・レクイエム

レクイエムとは「葬式の歌」と思う人が多い。私も以前はそうだった。

我が国ではレクイエムは「鎮魂歌」と訳されているが、これは誤訳に近い。鎮魂とは生前に想いが達成されずに非業の死を遂げ、その後悪霊として人々を苦しめた霊のたたりを鎮めるために、人々に災いを与えないように慰めるという言葉であって、レクイエムの本来の意味とは全く異なっている。

1991年にウィーン中心地シュテファン教会からの衛星中継放送で、モーツァルト没後200年のミサがORFとNHK共同製作で行われ、衛星中継で全世界に

1591年には豊臣秀吉が聚楽第で天正遣欧少年使節に接見した時にも聴きました。

プログラムによせて

今回は、ガンバ・コンソートの本来の姿に迫る一方で、これが実は当時の現代曲であったことから、そのライブ感が再現できれば日本人による作品を組んでみました。まずは、伊・英・独の作品から5声部の織りなす響きを、ジョスカン・デ・プレ、ジェズアルドのマドリガル、ダウラント、パーセルのファンタジア、バッハの鍵盤曲でお聞きいただきます。

後半には、ガンバ・コンソートらしさを保ちつつ私達の感性にも合う、水野勉さんの作品と、この10月3日のために譲渡在住の作曲家、佐藤容子さんに委嘱した新作「江の島伝説～天女と五頭徳の物語～」(初演)で、皆様とともに「今を彩りたい」と思います。



(江ノ島縁起絵巻)天女と五頭徳

神戸榎美ヴィオラ・ダ・ガンバ合奏団

神戸榎美(トレブル)、本多洋子(トレブル)、小林唯葉(テノール)、小澤絵里子(テノール/バス)、横川香織(バス)。



ヴィオラ・ダ・ガンバ コンソートの魅力 神戸榎美ヴィオラ・ダ・ガンバ合奏団

好きな音楽があると、誰しもそのルーツをたどってみたいと思うのではないでしょうか。例えば、バッハの音楽に感動したとき、そのバッハ自身が聞いて感動した先達の音楽とはどのような音楽だったのかと…。自筆楽譜や当時の楽器を使って、バッハの耳に聞こえたであろう音楽を想像し、復元を試みる作業は楽しいものです。今回は、古楽器ヴィオラ・ダ・ガンバが誕生したころの響きと、それを生かした曲の数々をお聞かせいただきます。

「フランツ・ヨーゼフ・ハイドン 公衆のコンサート」
1645年



楽器のこと

コンサートとは各声部が対等な合奏という意味です。今回聴いて頂くガンバ・コンソートは、バスからソプラノまで全音域にわたって同属楽器の編成です。これは一様の音色を得るため、均質な響きを理想とするルネサンス的な考え方に通っていました。ガンバ(イタリア語で脚の意)に扶んで構えるところから、ヴィオラ・

ダ・ガンバと呼ばれるガンバ(バス(低音)、テノール(中音)、トレブル(高音))のサイズがあり、ほぼ同時代にあった裏(ブラッチョ)に構えるヴァイオリン属とは構造上多くの点で異なっていました。弦の本数は6〜7本、指板には半音ごとにフレットを張り、4度と3度に調弦します。弓の構えは、お箸を持つようなアンダーハンドです。16-18世紀の西欧で貴族に嗜まれた楽器でしたので、大音量よりも優雅で上品な音色と、作品には演奏しやすく秀逸な質が求められました。18ルソーによると、ヴァイオリンは人を活気づけ、ガンバは心を落ち着かせ、とあります。古典派やロマン派の時代には、しばし忘れられましたが、間もなく19世紀の末より復興しました。1970年代に日本にも広まり、その音色と音楽の美しさから急速に愛好家を増やしています。



M.プレトリウス1619年

日本との関わり

時を遡ること400年、1561年に、ポルトガルの宣教師によって日本にガンバがもたらされました。宣教師のルイス・フロイスやアルメイダによると、翌年に大友宗麟が宣教師の住院(大分)に招かれ昼食の後で、コンサートを聴きました。

1581年には織田信長が安土のセミナリオ(現在の中学校)で、鷹持の後に立ち寄ってこの楽器を聴いて誉めました。

実況放送された。その時の司祭の言葉で、レクイエムは葬式ばかりでなく、父母や懐かしい故人を忍んだり、倫理を讀えたり、夢で再会を楽しんだり、思い出したりするロマンティックな面が強いことが解説された。

オーストリアは国の行事として(レクイエム)を取り上げたが、音楽が最大の産業であるが故の策で、観光宣伝も兼ねている面もあるがその影響力は大きい。

アマデウス合唱団はリクエストの多いレクイエムに挑戦して3度目なので、本当ならば全部暗譜でなくてはならないはずだが、それでもまだ時々自信のない個所が出てくる。モーツァルトは意地悪く、同じ繰り返しのように見えて同じ所は一度もない。

歌詞はおろかもロディヤシンコーペーション、そしてリズムまでが紛らわしく異なっている。演奏時間の1時間は常に張りつめていないと歌うことが出来ない。アマチュアの私たちににとっては難曲だ。

出演者は何度も練習するので、ある程度意味も解し、それなりの表現も出せるが、始めて聴く人の心を打つものはやはり、熱意、聴衆を巻き込むテクニックが必要だろう。

アマデウスの定期演奏会は、有り難い事に人気があり常に満席状態になるが、今年も来る10月10日(土)に藤沢市民会館大ホールでオーケストラ伴奏の定期演奏会で「レクイエム」が演奏される。この記事をご覧になった方々が聴いてくだされば幸いです。

小笠原 康二

湘南アマデウス合唱団・合奏団第17回定期演奏会 モーツァルト

レクイエム KV626

ソプラノ 松原 有奈 アルト 城守 香

テノール 前多 幸一 バス 佐竹 敬雄

合唱 湘南アマデウス合唱団

管弦楽 湘南アマデウス合奏団

オルガン 西 優樹 指揮 堀部 隆二

モーツァルト

歌劇「皇帝ディートリッヒの慈悲」KV621 序曲

シュペルト

交響曲第3番ニ長調 D200

管弦楽 湘南アマデウス合奏団

指揮 田部井 剛

藤沢市民会館大ホール

2015年10月10日(土)

午後1時30分開場 2時開演

主催 湘南アマデウス合唱団・合奏団

チケット 1,000円

お問い合わせ 赤羽根 0466-27-9779

随 口 0463-71-1507